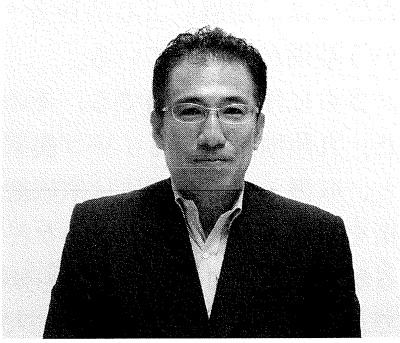
メーカーから“技術サービスプロバイダー“へ
第三の選択肢“リノベーション”を提案

株式会社日本紙工機械グループ　代表取締役社長
小崎 享氏



日本紙工機械グループ（茨城県北相馬郡利根町、☎0297-61-7117）は、昨年7月に開いた内覧会で、古い機械に最新の機能と制御機構を装備した“リノベーション”というコンセプトを紙工業界に提案した。

「紙工機械メーカーのビジネスモデルは、大きく新台の販売とアフターサービスの2つに大別される。リノベーションはその意味では“究極のアフターサービス”と位置づけられる」と小崎社長は話す。オーバーホールは、古い機械を新台当時の性能に復元することをめざすもの。しかし、一昔前の能力を取り戻し生産に利用できたとしても、競争力を獲得することは難しい。現代のニーズに対応した付加価値を追加する、または特別な用途に特化した専用機として生まれ変わらせることで「勝負できるマシン＝ソリューションを提供するのがリノベーション」だ。

「ユーザーの製造現場を活性化させるための選択肢の一つとして考えていただければ幸いだ」という。

昨年、公開した段ボール用「リノベーショングルア」（1400㎜タイプ）は、25年近く稼動していた機種の機械変速機構を全てインバータモータ方式に改造更新し、その他にも10カ所のリノベーションを施し飛躍的に操作性と生産性を向上させた。また「異品種混入バーコード検査装置」「黒色対応高性能センサー」など同社が次世代グルア向けに開発している新開発の機構も実験的に搭載し、注目を集めた。

「当社の『ワンタッチケースグルア』（旧タナベ）は、1981年、世界初のマイクロコンピュータ装置を搭載した。マイクロコンピュータは現在“第4世代”が主流。古いマシンは部品調達が不可能で、ユーザーは大きなリスクを背負っていることになる。最新の制御装置に更新すれば、リスクは解消され、さらに今後25年の使用が可能になる」と小崎社長は強調する。

2014年は、オランダJDエンジニアリングと共同開発したワンタッチケースグルア「TANABE JD BOXR（ジェディーボクサー）」を3台出荷した。欧州市場向けに約4年間をかけ開発した次世代型グルアは、円安を追い風に需要を伸ばした。2013年6月に初公開した際には、日本の大手段ボール企業も強い関心を示した。2015年には同機をベースに、日本向け次世代機を発表する計画を持っている。また、シェルフレディパッケージング（SRP）を効率的に製函できる「トライフィーダ」の需要も国内外とも堅調で、「SRPの市場は着実に広がっている」と手ごたえを感じている。

「板紙用小型機から段ボール用大型機まで幅広い品揃えのグルア、打抜機までのラインナップ、海外とのネットワークなど強みをさらに生かしていく」のが2015年の基本方針だ。

「メーカーという存在から一歩進化したい。ユーザーの機械部門を担っているという意識で、ニーズを先回りしていく。めざすは“技術サービスのプロバイダー”」と意欲を示す。